

## 一五世紀前半における少弐氏の朝鮮通交

— 室町幕府対立期における少弐氏と宗氏の関係を中心に —

伊 東 亜希子\*

## はじめに

本稿は少弐氏の一五世紀前半の朝鮮通交の形態の変遷を「同時通交者」に着目して検討するものである。

初期の朝鮮通交について、須田牧子は次のように述べる。明德三年（一三九二）七月に朝鮮が建国されて李成桂が王に即位し、同年一月にはその使者として覺槌が来日した。これに対して室町幕府は使者を派遣するという内容の返書を「室町殿名義ではなく僧侶の名義」で作成した。この交渉については単発で終わり、朝鮮王朝成立直後は、九州探題今川了俊が通交を独占していた。しかし、了俊が失脚して九州を撤退した応永二年（一三九五）以後は、その翌年に九州探題となった渋川満頼や、当時一族の当主にあつた大内義弘、宗貞茂、足利義満などの通交者が現れるようになった。これらのうち、宗氏の通交開始は応永六年であつた<sup>三</sup>。

応永三年に宗氏は朝鮮通交を同氏の下に統制するための策である文引制度を朝鮮から認められ、朝鮮通交において他者に優越する権限を獲得するようになった<sup>三</sup>。大友氏の大友持直も、永享元年（一四二九）七月に「初めて朝鮮に使節を派遣し、以後、通交貿易を継続した」とされる<sup>四</sup>。その後、一五世紀後半以降の朝鮮通交は宗氏が取り仕切るようになり、同氏が偽使（派遣者を偽って派遣される使者）による通交を活発化させた<sup>五</sup>。

本稿で注目する少弐氏は、後に示すように応永九年以降、朝鮮通交を行った。ここで、少弐氏を巡る国内の情勢も簡単に述べたい。一五世紀前半までの少弐

氏は基本的に九州の筑前に、宗氏は対馬に活動の拠点を置いていた。この少弐・宗両氏の主従関係は鎌倉・南北朝期に始まり、文明一〇年（一四七八）まで継続したと考えられている<sup>六</sup>。室町期の九州は幕府方と反幕府方による抗争が断続的に生じ、少弐氏はその抗争の中心にいた。応永四年に少弐氏は幕府方の九州探題渋川満頼と戦闘を開始するが、応永六年末から応永一二年までは一旦和睦する。その後再び戦闘状態になり、応永三年に少弐氏は九州探題に勝利する。しかし今度は幕府の料国となった筑前国の代官として筑前国に進出してきた大内氏と対立し、それは永享四年に少弐氏が幕府から一時的に赦免されるまで続いた<sup>七</sup>。

この間の少弐氏の朝鮮通交については、いくつか指摘されている点はあるものの、実態については不明な部分が多い<sup>八</sup>。少弐氏の朝鮮通交は、幕府方の大内氏などの通交とは異なる傾向として、領国内に敵対する幕府勢力が進出してくる状況で行われていた点があるように思われる。そう考えると、少弐氏の通交は他の勢力の通交とは果たした役割が異なっていた可能性がある。また、従来少弐氏の臣下であつた宗氏が朝鮮通交の主導権を掌握していくなかで、主人たる少弐氏はどのような位置づけを宗氏や朝鮮からなされていたのであろうか。朝鮮通交が宗氏の統制下におかれる過程を明らかにする上で、少弐氏の動向を検討することは不可欠といえよう。

そこで注目したいのが、少弐氏の通交時に少弐氏とともに通交を行っている者の存在である。本稿ではこれを「同時通交者」と呼称し、分析の対象とする。現在の対外交渉史研究では、なぜ人が海を渡って通交するのかといった大きな視点から研究が進められている<sup>九</sup>。ただ、通交を行う人々の在り方の細部については、とくに「同時通交者」の実態については明らかにされてこなかった。同時通交者を伴う通交を少弐氏が行つた意味、また、同時通交者が変わることで、変わらないことが意味するところを検討し、人が共に通交する意味を考えることで、対外交渉史研究の全体像の把握につなげたい。

検討の対象とする時期は、少弐氏が通交を開始した応永九年から、永享二年までとする。本来であれば少弐氏滅亡までの同氏の通交をすべて取り上げるべきであるが、先に述べたように、永享四年に少弐氏は幕府から赦免を受け、九州での立場を大きく変化させることになる。また、この時期以後、少弐氏の滅亡までみると、永享四年から嘉吉三年（一四四三）まで同氏の通交がない。しかも一五世

キーワード：対外交渉、朝鮮、少弐氏、宗氏、室町幕府

\*平成二七年度生 比較社会文化学専攻

紀後半からは少弐氏から派遣されたと称する偽使も横行した可能性が高い。

以上を踏まえて、まず第一章において、応永九年に少弐氏が朝鮮通交を開始した際の状況と、それ以後の少弐氏の通交の状況を宗氏との関連を考えながら概観したい。続いて第二章と第三章では、少弐氏の通交を便宜的に宗家当主の在任期間で区分して論ずる。第二章では、少弐氏が通交を始めた後の宗貞茂が当主であった応永一九年～応永二一年の少弐氏の通交の形態を明らかにしたい。第三章では、貞茂の跡を継承した貞盛が当主であった応永三〇年～永享二年の通交の形態を検討する。また、第四章では、正長元年（一四二八）の足利義持死去の際、九州の勢力が朝鮮に対して行った義持死去の報告のあり方を通して、少弐氏の朝鮮通交の状況を検討し、同氏と宗氏の関係を考えたい。

## 一、朝鮮通交における少弐氏と宗氏の関係

管見によれば最初の少弐氏の朝鮮通交は、『朝鮮王朝実録』<sup>二</sup>の太宗二年（応永九・一四〇二）五月戊申二六日条に見出すことができる。

賜対馬島守護宗貞茂土物、就付使人、以送人參二十斤、黒麻布三匹、白苧布三匹、米四十石、豆二十石、又賜宗和殿、宗九郎、宗五郎、小二殿等使人、米豆各十石、松子各二石、虎皮各一張、時貞茂献礼物故也

右の史料の解釈は「対馬島守護の宗貞茂に朝鮮の産物を与えた。宗貞茂の使節に託した。人參二十斤、黒麻布三匹、白苧布三匹、米四十石、豆二十石を貞茂に送った。また、宗和殿、宗九郎、宗五郎、小二（少弐）殿等の使節にも、米と豆を十石、松子を二石、虎皮一張を一組としてそれぞれに与えた。その時に、貞茂が礼物を献じたからである」となる。

ここに登場する「小二殿」は、宗貞茂が従っていた少弐貞頼のことであると考えられる。少弐貞頼は「小二殿」として全通交者の末尾に記されるものの、敬称が付けられている。宗貞茂に関しては、最初に名前が挙げられるが敬称は付けられていない。この理由は、以前から通交歴のある宗氏を最初に記述したが、朝鮮側はあくまで宗氏は少弐氏の下位にあるという認識に基づき、宗氏には敬称を付

けなかったのではないかと思われる。通交者に名を列ねる者のうち、「宗九郎」、「宗五郎」は対馬の宗氏の一族とされている<sup>二</sup>。「宗和」については不明であるが、「宗」を名乗る以上、おそらく対馬宗氏の一族であろう。いずれにしても、少弐等の通交が成り立ったのは「（宗）貞茂が礼物を献じたから」であった。このように、少弐氏の通交は、宗貞茂の朝鮮通交に便乗する形で開始することができたと推測される。

それでは、以後の少弐氏の通交はどのように行われたのであろうか。とくに少弐氏と同時に通交を行った勢力に注目し検討したい。『対外関係史総合年表』<sup>三</sup>を参照しつつ、『朝鮮王朝実録』に基づいて整理したのが後掲の表「少弐氏の朝鮮通交の形態及び他の勢力との関係」である。これによると、応永九年の最初の朝鮮通交から一〇年後である応永一九年～二一年までの期間、すなわち宗貞茂が当主であった時期であるが、少弐氏の通交が九例確認できる。この九例うち、五例は宗家当主の宗貞茂と共に通交していることが判明する。

その後、宗貞茂の子・宗貞盛が当主であった応永三〇年～永享二年（一四三〇）までの期間は、少弐氏の通交が一三例確認できる。この時期には、宗貞盛と共に通交している事例はわずかに二例しか確認できない。これに対し、当主以外の宗氏一族と一緒に通交が三例、対馬の早田氏（早田左衛門太郎とその子供の六郎次郎）と一緒に通交が五例と増えている。

以上のように、宗氏の通交に便乗する形で開始した少弐氏の朝鮮通交は、多くが宗氏の当主家や当主以外の宗氏一族、宗氏と同じく対馬を拠点とする早田氏と共に行われており、彼らの影響が大きいのではないかと考えられる。早田氏は対馬に拠点を置く、本来は倭寇的な勢力であった。長節子は、早田六郎次郎を賊首早田左衛門太郎の子で、六郎次郎自身も賊首であり、両者は共に朝鮮通交を行い、なかでも六郎次郎は朝鮮通交の特権の確保に努めたとしている<sup>三</sup>。

それでは次に、少弐・宗氏の朝鮮通交を史料に即して具体的に検討してゆく。

## 二、宗家当主と共に通交する少弐氏（一四二二（応永一九）・太宗二二）～一四二四年（応永二二）・太宗二四）

本章では、宗貞茂が当主であった期間（応永五～応永二五年（一三九八～

一四一八年）（朝鮮・太宗七〜一八年）の、応永一九年〜二一年における少弐氏の朝鮮通交の状況を検討する。この期間において、少弐氏の当主は少弐満貞であった<sup>一四</sup>。

まず、宗貞茂の当主在任期間における少弐満貞の朝鮮との通交状況のうち、同時通交者があるのは、表の②③④⑧⑨⑩の事例である<sup>一五</sup>。これらのうち、表②③④⑧⑨の五事例は、いずれも宗貞茂と通交している。これらの場合、少弐氏は「小二殿」という敬称で呼ばれているが、宗貞茂には敬称がない。朝鮮側は、少弐氏と宗氏は主従関係にあり、少弐氏の方が宗氏よりも上位であるという応永一五年当時の認識<sup>一六</sup>を、この時期においても変えていないと考えられる。続く⑩の九州探題渋川満頼と少弐満貞の同時通交の際には、どちらにも敬称はない。理由は不明であるが、少なくとも、どちらが上位・下位という別はない。少弐満貞は当時筑前守護であり<sup>一七</sup>、この少弐満貞と九州探題である渋川満頼を、どちらも日本の一地域の支配者ということで朝鮮は同等に認識していたともみられる。

次いで、少弐氏が単独で朝鮮通交を行う状況を検討したい。表の⑤⑥⑦の事例である<sup>一八</sup>。この時期の最初の通交を記すのが表⑤であり、「朝鮮が「日本国筑州藤公」（少弐氏カ）に大蔵経を贈った。この贈与は、（少弐氏が）朝鮮に対して請求していたことによる」とある。この史料から少弐氏は単独で大蔵経を請求し実際に送られたことがわかる。応永二〇年三月二日に宗貞茂は宗氏として初めて朝鮮から大蔵経を送られていたから<sup>一九</sup>、少弐氏が大蔵経を贈られたのは、宗氏が贈られてから三カ月後であったことになる。また、⑥・⑦のうち同様のことが⑦の通交にもうかがうことができる。「筑州太宰府司馬少卿」である藤原満真（少弐満貞カ）の使節が朝鮮に対して「礼物」を献上し、朝鮮に梵鐘を求めていた。少弐氏に遅れて三カ月後の九月二九日<sup>二〇</sup>に宗貞茂は朝鮮に対して梵鐘を請求している。

このように、応永一九年〜二一年における少弐氏単独での朝鮮通交三例をみると、二例（⑤・⑦）は少弐氏と宗氏が、ほぼ同時期に同じ物品を請求していて、実質的に同時通交に近いものであった。

以上より、少弐氏は朝鮮と通交する場合、宗貞茂と共に通交することが請求した物資を確実に朝鮮から得るために有効であり、宗氏もこれと同様に考えていることが推測される。また、『朝鮮王朝実録』における「殿」の表記の有無を踏まえ

るならば、応永一五年当時に引き続き、この時期においても少弐・宗氏が主従関係にあり、少弐氏が宗氏の上位者であるという朝鮮の認識は、変わらなかつた可能性が強い。

### 三、対馬の諸勢力と同時通交する少弐氏（一四二三（応永三〇・世宗五）〜一四三〇年（永享二・世宗一二））

次に少弐氏の朝鮮通交を、応永三〇年〜永享二年の期間について具体的にみてゆこう。少弐氏単独での朝鮮通交は、正長元年一〇月二六日（⑱）、永享元年七月四日（⑳）、同二年七月二七日（㉑）の三例<sup>二一</sup>であるのに対し、同時通交者がある通交は九例である。なお、応永三二年一月九日（㉒）の一例は同時通交者の有無も不明である。

これら同時通交者がある九例のうち七例は、いずれも、対馬の早田氏、あるいは当主以外の宗氏が同行していることが注目される<sup>二二</sup>。⑪では、対馬の早田左衛門太郎と源才<sup>二三</sup>、大蔵氏種<sup>二四</sup>と共に、⑬では、早田左衛門太郎、渋川満頼、渋川義俊、そして大内盛見と共に、⑭では、当主ではない宗氏の宗茂世、小早川則平（平常嘉）<sup>二五</sup>と共に、⑮では宗盛国・貞盛兄弟の母と祖母、早田左衛門太郎、九州節度使（九州探題カ）と共に、⑯では宗貞盛、早田左衛門太郎、宗金<sup>二六</sup>と共に、⑳では宗盛国・宗金と共に、㉑では早田六郎次郎と共に、それぞれ少弐氏は通交している。同時通交者のいる残りの二例は、⑰では、宗貞盛、源英<sup>二七</sup>、小早川則平と共に、⑲では大内持世と共に行つた例である。この時期、朝鮮通交において当主以外の宗氏、早田氏といった対馬の勢力に支えられながら、少弐氏は安定した通交内容を持続させていた可能性が高い。ただし、応永三二年から幕府方との対立期に入ると、少弐氏は再び宗家当主を同時通交者として通交を行った。それが表の⑳<sup>二八</sup>と㉑<sup>二九</sup>の宗貞盛との同時通交である。これは、劣勢であった幕府との戦闘に必要な物資を通交に求めようとしたためで、確実に通交を成し遂げるために宗家当主の朝鮮通交に便乗することが有効と考えたためと思われる。

しかし、宗家当主以外を同時通交者とする通交も相変わらず確認できる（⑩・⑬・⑭・⑮・⑰・⑲・⑳・㉑）。この時期は、応永三三年に導入されることになる文引制度により、「宗氏一門、早田氏などの通交権に事実上の制限を加え、とりわ



け早田氏は通交の停止を余儀なくされた」時期で、宗貞盛に通交権が掌握されるようになってゆく時期でもあった<sup>二九</sup>。これに対して、当主以外の宗氏や早田氏がすでに危機感を覚え、宗家当主よりも上位の少武氏の朝鮮通交に同行することで、それまでの通交における利益の保持に努めたことも大いに考えられる。

このように、少武氏は幕府と対立し戦闘状況が悪化すると宗家当主の通交に再び便乗した。それが可能であったのは、当時も少武・宗氏の主従関係が継続していたためで、長節子も述べるように文明一〇年まで両者の主従関係は続いていたことがうかがえる。また、文引制度が開始されると当主以外の宗氏、早田氏は少武氏に同行することで朝鮮通交を実現させていた可能性が高い。ただ、先述のように応永三二年に少武氏によって敗退させられた九州探題洪川義俊や、幕府方の小早川則平、筑前国を巡って少武氏と対立している大内氏との同時の通交もみられる。これについては、少武氏と幕府方が手を組んで通交したという可能性は低く、偶然の一致ということも考えられなくはない。しかしひとまずは、来朝の時期は多少異なっていたものの、近接していたために『朝鮮王朝実録』にまとめて記載されたと推測しておきたい。

#### 四、足利義持の死去を伝えた対馬の諸勢力や少武氏に対する朝鮮側の対応

さて、前章で扱った一四二三（応永三〇・世宗五）～一四三〇年（永享二・世宗一二）における少武氏の通交をさらに検討するに当たり、室町殿である足利義持の死去が日本側からどのように伝えられ、それが朝鮮側でどのように受け取られたのかを検討しておきたい。世宗一〇年（一四二八）の『朝鮮王朝実録』によれば、日本の五つの勢力が朝鮮に対して足利義持の死去を報告している。以下で日付のみの引用は、いずれも同書からのものである。

同年五月戊午七日条によれば、早田左衛門太郎（左衛門太郎）<sup>三〇</sup>が義持の死去を朝鮮に報告した。これに対して朝鮮側は「国王皇帝薨逝の聲息を（左衛門太郎が）報告してきた」と記述する。

同年七月甲子一四日条によれば、博多の商人宗金が義持の死去を朝鮮に報告している。なおこのとき宗金は、被虜人二名を朝鮮に送還した。

同年八月乙巳二六日条では、平（小早川）常嘉（則平）が朝鮮に義持の死去を知らせている。常嘉は「正月己亥に我が国王殿下義持が薨じた。跡を継ぐべき子供がいなかったたので、義持の弟が即位した。」と朝鮮に告げている。なお、このとき常嘉は朝鮮に対して『大般若経』を請求している。実は常嘉は、これに先立つ同年三月一日にも請求していたが、朝鮮側から拒否されていた。今回の交渉では再び拒否されることを避けようと、義持死去の情報をもたらすことと引き替えに、朝鮮側から譲歩を引き出そうとしたのであろう。しかし結果的には、この二度目の請求にも関わらず、常嘉は目的の『大般若経』を得られなかった。

同年一〇月甲辰二六日条<sup>⑱</sup>は少武満貞（大宰少武藤原満貞）の報告である。「我殿下は春月即世し、弟が位を継いだ。」と報告したとある。このとき朝鮮の産物を得て幕府にあいさつしたいと申し出ている。少武満貞は、使者派遣当時、幕府と抗争中で劣勢であったが、以前は幕府と物品の贈答を行い<sup>三一</sup>幕府と親密な時期もあった。少武氏は、かつての幕府との親密な関係を強調し、義持死去の報告をすることで、戦闘に必要な物資を得ようとしたと考えられる<sup>三二</sup>。その努力の成果か、先の小早川常嘉の要求は断られたが、少武氏の要求は朝鮮から認められている。

世宗一一年六月戊子一三日条では、かつて九州探題を務めていた洪川満頼（右武衛源道鎮）<sup>三三</sup>が、義教について朝鮮に報告したことが記されている<sup>三四</sup>。「今我王登祚、兼相公新立」とあるが、この「我王」は義教のことであり、「登祚」は征夷大將軍に補任されたことを示していると考えられる。この際に満頼は朝鮮側に対して物資の下賜を願った。「もし、朝鮮から物資を得られれば、同僚に分け与えたい。それもまたよいことではないだろうか」などと述べてより多くの物資獲得を狙っているが、それだけのことをする必要が当時の満頼にはあつた、ということであろう。満頼は応永三二年には隠居することを幕府に上申し、それを認められていたが、翌年に少武満貞が反乱を起こすと、満頼の跡を継承して九州探題となっていた義俊の支援を命じられている<sup>三五</sup>。この義俊は応永三二年に少武氏との抗争によって没落し、その後探題職は義俊とは別系統の満行系洪川氏の満直が継承した。この義俊から満直への探題職継承は平和裏に進められたわけではなかった可能性が黒嶋敏によって指摘されている<sup>三六</sup>。このことを踏まえるのであれば、世宗一一年の朝鮮への報告の時点で、満頼の敵対者は少武氏とも満行

系洪川氏とも考えられる。いずれかの勢力（あるいは両方か）と対立し、物資が不足していたために、満頼が窮状を訴えた可能性は大きい。このとき結果的には、洪川氏は物資を得ることができた。

これらの諸勢力に対し、少弐氏に先駆けて朝鮮通交を開始した宗氏は、義持死去の際に朝鮮に使者を派遣していなかった点に注目したい。

世宗一〇年一月甲申七日条によれば、義持死去の後、朝鮮使節が日本に向けて出発した。この使節の派遣に際して書を朝鮮から送られたのは、室町殿の足利義教をはじめとして、宗家当主宗貞盛、先述の報告を朝鮮にした早田左衛門太郎と少弐満貞、洪川氏<sup>三六</sup>、壹岐の志佐氏と佐志氏<sup>三七</sup>、さらに、幕府の支配下にある大内持世であった。これらの勢力は、朝鮮側が通交する上で、重要であると認識していた者たちと思われる。朝鮮は通交の実績のある宗氏を大内氏などと共に重要人物と考え、義持死去と義教の家督継承を報告していなかったにも関わらず、宗貞盛に独自に書を送ったものとみられる。

右で述べたように、この書は少弐氏にも送られていた。国内では幕府との戦闘で劣勢であった少弐氏であったが、義持の死去に際して少弐氏から使者を派遣し、物資まで獲得、さらに返礼の書まで送られていることを踏まえるならば、その通交は少弐氏の置かれた国内状況と異なり、かなり順調に行われていたといえよう。

以上のように、応永三〇年から永享二年にかけて少弐氏は、幕府との戦闘で劣勢であったが、朝鮮通交については他の勢力と比べても割合順調で、戦闘に必要な物資も得ていたとみられる。その背景には、宗家当主との同時通交も再び行われていることも併せて考えると、宗家当主の通交の実績が朝鮮に認められたことがあり、この宗氏の通交における特権的な立場を利用して、少弐氏は朝鮮との通交を順調に行っていたと考えられる。

## おわりに

本稿では応永九年（一四〇二）から永享二年（一四三〇）にかけての少弐氏の朝鮮通交における同時通交者に注目し、とくに宗氏との関連を中心に、少弐氏の通交の変遷を『朝鮮王朝実録』をもとに検討した。最後にこれまで述べてきたことをまとめておきたい。

少弐氏の朝鮮通交は応永九年に宗氏の朝鮮通交に同行して、半ば便乗する形で行ったのが最初であった。宗貞茂が少弐氏の朝鮮通交に大きく関わっていた応永九年から二十一年までの期間に朝鮮と通交する場合、宗貞茂の通交に便乗することが、請求した物資を確実に朝鮮から得られると考えており、宗氏もこれと同様であったと推測した。応永三〇年から永享二年までの期間は、少弐氏の朝鮮通交に宗家当主が同行する回数は減少するものの、少弐氏は幕府との戦闘で劣勢であるにも関わらず、要所では宗家当主と共に通交し、割合順調な通交によって、戦闘に必要な物資を得ていたとみられる。その背景には、応永三三年に朝鮮から文引制度開始を認められることにもつながる宗家当主のそれまでの通交実績が認められ、進展したことが考えられよう。また、宗家当主との通交に代わって、当主以外の宗氏一族や対馬の早田氏が少弐氏の朝鮮通交に同行する事例が増えていく。この時期に宗家当主以外の対馬の勢力は、文引制度開始により利益を失うことを恐れ、少弐氏の通交に同行することでそれまでの通交における利益の確保に努めたためと考えられる。少弐氏の努力と詭弁に加え、そうした勢力の存在が、国内では劣勢に立たされることが多かった少弐氏による独自かつ円滑な朝鮮通交を可能にしていたと考えられる。

表 少弐氏の朝鮮通交の形態及び他の勢力との関係

番号	年月日	同時通交者の有無	少弐氏と共に通交した者				宗氏の当主	少弐氏の当主	少弐氏と幕府の関係	
			宗氏当主	当主以外の宗氏	対馬の勢力	その他の勢力				不明
①	1402年(応永9)5月26日	○	宗貞茂	宗九郎・宗五郎				宗和	少弐貞頼(当主期間不明～1404)	幕府と一旦、和睦
②	1412年(応永19)1月19日	○	宗貞茂						宗貞茂(当主期間1398～1418)	幕府によって筑前守護を任せられていたことは確実
③	1412年(応永19)2月19日	○	宗貞茂							
④	1413年(応永20)5月23日	○	宗貞茂							
⑤	1413年(応永20)6月11日	×								
⑥	1414年(応永21)5月27日	×								
⑦	1414年(応永21)6月28日	×								
⑧	1414年(応永21)8月7日	○	宗貞茂							
⑨	1414年(応永21)10月17日	○	宗貞茂							
⑩	1414年(応永21)11月21日	○				渋川満頼				
⑪	1423年(応永30)9月24日	○			早田左衛門太郎		源才・大蔵氏種			
⑫	1424年(応永31)1月9日	少弐氏が他の通交者と一緒に朝鮮に使者を派遣したかどうかは不明。このとき、少弐氏に贈る物品の基準を定める記述がある。								
⑬	1424年(応永31)2月7日	○			早田左衛門太郎	渋川満頼・渋川義俊・大内盛見				
⑭	1424年(応永31)8月21日	○		宗茂世		平常嘉(小早川則平)				
⑮	1426年(応永33)1月25日	○		対馬島宗彦七(盛国か)・彦六(貞盛か)親母祖母	早田左衛門太郎	九州節度使				
⑯	1426年(応永33)11月1日	○	宗貞盛		早田左衛門太郎	宗金				
⑰	1428年(正長元)7月10日	○	宗貞盛			源英・平常嘉(小早川則平)				
⑱	1428年(正長元)10月26日	×								
⑲	1428年(正長元)11月26日	○				大内持世				
⑳	1428年(正長元)12月14日	○		宗彦七盛国		宗金				
㉑	1429年(永享元)7月4日	×								
㉒	1430年(永享2)5月22日	○			対馬六郎次郎					
㉓	1430年(永享2)7月27日	×								

(『朝鮮王朝実録』による。対外関係史総合年表編集委員会『対外関係史総合年表』(吉川弘文館、1999年)、長節子『中世日朝関係と対馬』(吉川弘文館、1987年)、本多美穂「室町時代における少弐氏の動向―貞頼・満貞期―」(『九州史学』91、1988年)も参照した。

## 【注】

- 一 当時の朝鮮通交は、朝鮮・幕府間に限らず、多くの日本側の勢力が自由に朝鮮と通交し利益を得ていたことが特徴である。中村榮孝『日鮮関係史の研究 上』（吉川弘文館、一九六五年）、田中健夫『中世対外関係史』（東京大学出版会、一九七五年）、三宅英利『通信使の初期形態』（『近世日朝関係史の研究』文献出版、一九八六年）、関周『室町幕府の朝鮮外交―足利義持・義教期の日本国王使を中心として―』（阿部猛編『日本社会における王権と封建』東京堂出版、一九九七年）、同『中世日朝海域史の研究』（吉川弘文館、二〇〇二年）など参照。
- 二 須田牧子『大内氏の対朝関係の変遷』（『中世日朝関係と大内氏』東京大学出版会、二〇一一年）。
- 三 中村榮孝は文引制度の確立したことについて「日鮮交通統制の策として、もっとも重要な位置を占めることになった。同時に、宗氏の特権もまた、これによって確保されることになったわけである」と指摘する（前掲注一 中村著書、一七七―一七九頁）。
- 四 伊藤幸司『日朝関係における偽使の時代』（『日韓歴史共同研究報告書』第一期、二〇〇五年）一一三頁。
- 五 荒木和憲「宗貞盛の政治的動向と朝鮮通交」（『中世対馬宗氏領国と朝鮮』山川出版社、二〇〇七年、初出二〇〇三年）。
- 六 少弐氏と宗氏の関係について、荒木和憲は鎌倉・南北朝期を始まりとし（荒木『対馬宗氏の中世史』吉川弘文館、二〇一七年、一六頁）、長節子は「当初宗氏は対馬の地頭代で、守護・地頭である少弐氏の被官であり、南北朝の争乱には少弐氏と行動を共にし、九州本土へしばしば出兵している」とする（長『中世日朝関係と対馬』吉川弘文館、一九八七年、二二―二五頁）。応永一五年の時点では、本多美穂は、少弐氏が筑前守護で、宗氏が筑前守護代であり、両者が主従関係にあったと指摘する（本多『室町時代における少弐氏の動向―貞頼・満貞期―』『九州史学』九一、三三―三四頁）。また長は前掲箇所において、少弐氏と宗氏の関係の終焉について、文明一〇年（一四七八）に大内氏が宗氏に対して、少弐氏に味方しなかったことを褒賞し、少弐氏の残党が対馬にやってきたら成敗するように宗氏に求めたことを記す『正任記』の記事により、「宗氏は文明十年にいたって、数十年來の宿敵大内氏と結び、以後少弐氏を支持しなくなったのである」と述べている。
- 七 前掲注六、本多論文。
- 八 前掲注一 中村著書では、朝鮮通交における統制策を朝鮮側が取る上で、応永二一年に少弐氏に對して優遇措置が取られた点、および、永享一一年には宗貞盛と少弐氏を厚遇して、通交における雑多な勢力を淘汰しようとする意見が朝鮮内で出たが、結局は当時完成しつづつあった文引制度による統制を中心として解決することに決まったことが指摘されている。また荒木は、少弐氏が幕府の代弁者として機能していた事例として応永の外寇後の対応を挙げている。戦後処理交渉において、朝鮮との通交の可否について少弐氏が足利義持に諮ったところ少弐氏の意思に任せるとの返答であったという内容の発言を、宗貞盛と早田左衛門太郎の使者が朝鮮に対して行うことで、

少弐氏の意思が足利義持の意思であることを朝鮮側に示し、少弐氏による「武力行使を示唆すること」で、宗氏側が朝鮮に外交圧力をかけた」と論じている（前掲注六、荒木著書、五九―六六頁）。

九 網野善彦『海と列島の中世』（講談社、二〇〇三年）。羽田正編、小島毅監修『東アジア海域に漕ぎだす 1 海から見た歴史』（東京大学出版会、二〇一三年）。

一〇 本稿では『朝鮮王朝実録』（学習院大学東洋文化研究所版）を使用する。本稿で扱った『朝鮮王朝実録』の記事の解釈は、『国史編纂委員会提供『朝鮮王朝実録』のデジタルテキスト *sillok history book* を参照した。

一一 長節子によると、宗九郎と宗五郎は少弐氏と同じ回賜品を与えられていることから、「朝鮮から相当勢力のある対馬人として認められていたこと」は間違いないとする（前掲注六、長著書、一〇〇―一〇三頁）。

一二 対外関係史総合年表編集委員会編『対外関係史総合年表』（吉川弘文館、一九九九年）。

一三 前掲注六、長著書、一七一頁。

一四 少弐満貞の国内における活動については、本多美穂の研究で詳細に述べられている（前掲注六、本多論文）。

一五 表の②③④⑧⑨⑩に関する『朝鮮王朝実録』の記事は次の通りである。

② 「日本小二殿、宗貞茂等使人来、献土物」（太宗二二年一月甲辰一九日条）

③ 「小二殿、及宗貞茂使送客人来」（太宗二二年二月甲戌一九日条）

④ 「宗貞茂、宰府小二殿使人来、献土物」（太宗一三年五月辛卯二三日条）

⑧ 「(前略) 宗貞茂使人三十四名、小二殿三十一名、一岐州二十名、日向州二十名共、一百五名、俱在蔚山、怒請鍾鏓緩給付、拔劍、欲害郡人、恣行暴乱(後略)」（太宗一四年八月丁未七日条）

⑨ 「日本小二殿使送客人、及宗貞茂使送客人来、献土物」（太宗一四年一〇月丁亥一七日条）

⑩ 「九州都元帥右武衛藤源満貞使人献礼物、求大般若経、筑州藤源満貞使人献礼物、求白銀」（太宗一四年一月庚申二一日条）

一六 前掲注六、本多の指摘による。

一七 前掲注六、本多論文。

一八 表の⑤⑥⑦に関する『朝鮮王朝実録』の記事は次の通りである。

⑤ 「送大藏経于日本国筑州藤公、従其請也」（太宗一三年六月戊午一一日条）

⑥ 「日本少二殿使人、来献土物」（太宗一四年五月己亥二七日条）

⑦ 「筑州太宰府司馬少卿藤源満貞使人献礼物、求梵鐘、請還左衛門」（太宗一四年六月甲辰二八日条）

一九 「朝鮮王朝実録」太宗一三年三月辛巳二日条。須田牧子「対馬宗氏の大藏経輸入―杏雨書屋所蔵大藏経の紹介を兼ねて―」（『日本歴史』七八四、二〇一三年）参照。

二〇 「朝鮮王朝実録」太宗四年九月己亥条。

二一 表の⑮⑯⑰に関する『朝鮮王朝実録』の記事は次の通りである。

⑮ 「朝鮮王朝実録」太宗四年九月己亥条。

⑯ 「朝鮮王朝実録」太宗四年九月己亥条。

⑰ 「朝鮮王朝実録」太宗四年九月己亥条。



- ⑱「筑前州大宰少式藤原満貞、致書礼曹曰、近來寇敵侵弊邑、掣我僚属、屯于他邦、我殿下春月即世、弟乃嗣位、欲啓其賀志、而力微無及、若得荷貴国産物之賜、將遂其薄礼也、仍献大刀、鐔、浅黄糸等物、答書、回賜米一百石、白細苧布、黒細麻布、白細綿袖各十匹、雜彩花席十張、虎豹皮各二張、焼酎三十瓶、」(世宗一〇年一〇月甲辰二六日条)
- ⑲「日本国藤原満貞、遣人献土物、回賜正布六十一匹」(世宗一一年七月戊申四日条)
- ⑳「太宰小二小法師瓦(丸カ)、致書礼曹云、自去年冬、来寓对馬州、願加護恤、且欲致礼京都、乞賜綿袖或苧布一千匹及米穀、仍献土宜、答書、回賜正布三十六匹、(中略)命賜米四十石、袖十匹、」(世宗一二年七月乙丑二七日条)
- 二二 同時通交者がいる九例である表の⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳および、同時通交者が不明の㉑に關する『朝鮮王朝実録』の記事は次の通りである。
- ⑬「賜日本禪和子源才衣一襲皮鞋一雙、日本国筑前州太守藤原満貞及其幕下備州刺史砥上大藏氏種、左衛門大郎等使人献土物、(後略)」(世宗五年九月壬寅二四日条)
- ⑭「賜大内殿徳雄豹皮一領、虎皮二領、綿袖五匹、苧布五匹、彩花席十張、故宗貞茂妻子造米五十石、綿袖十匹、左衛門大郎焼酒三十瓶、苧布五匹等物、付回礼使行、源義俊、小二殿、藤原満貞、宗貞盛等処賜送之物、亦依壬寅年例、」(世宗六年一月丙戌九日条)
- ⑮「礼曹参判李明徳答書于日本国九州前都元帥源道鎮曰、承書、(中略)礼曹参議成概答書于筑前州太守府少卿藤原満貞曰、書至、(中略)礼曹佐郎金填答書于对馬州左衛門大郎曰、得書、(中略)礼曹参判李明徳答書于日本国大内殿多良公曰、緬惟体履康裕、(中略)礼曹参判李明徳答書于九州都元帥将監源義俊曰、承書、(後略)」(世宗六年二月癸丑七日条)
- ⑯「九州州刺史平常嘉使人献蘇木一千、(途中略)日本国大宰府右馬近江守茂世使人献土宜、筑州刺史藤原満貞使人献金襴一段、(後略)」(世宗六年八月癸亥二二日条)
- ⑰「命賜小二殿、九州節度使、对馬島宗彦七・彦六親母祖母及左衛門大郎等処酒果糧米、(後略)」(世宗八年一月庚申二五日条)
- ⑱「日本筑州石城管事宗金、使人奉書礼曹、(中略)筑前州大宰少式藤原満貞、使人奉書〇礼曹、(途中略)对馬州宗貞盛・左衛門大郎等奉書礼曹(世宗八年一月庚寅一日条)
- ⑲「日本源英遣人献土物、(中略)日本平常嘉遣人献土物、(中略)九州少式藤原満貞遣人献土物、(途中略)宗貞盛遣人献土物、(後略)」(世宗一〇年七月庚申一〇日条)
- ⑳「請以賜小二殿之物、移賜大内殿、加賜豹皮一張、虎皮二張、細袖苧布各五匹、彩花席五張、(後略)」(世宗一〇年一月甲戌二六日条)
- ㉑「九州宗金致書礼曹曰、(中略)仍献土物、(中略)藤原満貞遣人來献土物、(中略)宗彦七盛国致書請還被留人、仍献土物、(後略)」(世宗一〇年二月辛卯一四日条)
- ㉒「对馬島六郎次郎、遣人献土宜(中略)、筑前州藤原朝臣満貞、遣人献土宜(後略)」(世宗一二年五月辛酉二二日条)
- 二三 村井章介は「源氏で一字名を標識とする」のは「松浦党の構成員」としており(村井「松浦

- 党の壹岐島「分治」と境界人ネットワーク」(『日本中世境界史論』岩波書店、二〇一三年)一八七頁)。「源才」は松浦党の一員とも考えられるが、詳細は不明である。
- 二四 大藏氏の一族に秋月氏や田尻氏などがあり、「種」を通字としているとみられ、とくに秋月氏については、秋月種雄の時期から筑紫秋月城に居して、秋月氏の祖となる、と『続群書類従』第七輯下、系図部にある。秋月氏などが大藏姓を名乗って朝鮮と通交したことも考えられるが、「大藏氏種」の詳細は不明である。
- 二五 常嘉は幕府の命によって九州に出陣した(片山司「十五世紀における国人小早川氏と室町幕府権力」『鳴門史学』一九号、二〇〇五年、四九頁)。この頃は九州を拠点とした活動も行っていたと考えられる。
- 二六 宗金は博多の商人であるが、断絶していた幕府の遣明船再開などにも尽力した(前掲注四伊藤論文、一一四頁)。朝鮮と幕府両者との強い関係がうかがえる。
- 二七 『朝鮮王朝実録』世宗一〇年七月庚申一〇日条。「日本源英」について長節子は「塩津留沙弥源英」のことであり、肥前上松浦の塩津留に居住していた「松浦党の一族」であるとしている(前掲注六、長著書、一九八七年、二三九―二四〇頁。同著『中世国境海域の倭と朝鮮』(吉川弘文館、二〇〇二年)二九二頁)。
- 二八 『朝鮮王朝実録』世宗八年一月庚寅一日条。
- 二九 世宗六年ごろを境にして、宗貞盛や一部有力者に通交権が掌握されるようになった。このような状況で、一部の有力者が宗貞盛に関係なく、勝手に自己名義の使人を発遣する特権を保持したため、世宗八年に宗貞盛は朝鮮に「文引制施行の申し入れ」を行い、朝鮮通交に対して「統制を加える新たな権限を獲得」しようとした(前掲注六、長著書、一七〇頁。このように文引制度が開始したが最初は厳密に運用されず、宗貞盛は朝鮮に対して文引制度の強化を求めたとする(前掲注六、荒木著書)。
- 三〇 史料中の「左衛門大郎」を、関周一は「早田左衛門太郎」であるとすると(前掲注一、関論文、一四一頁)。
- 三一 応永二四年一二月三日足利義持御内書写(『後鑑』(『新訂増補国史大系』吉川弘文館、一九六五年))。
- 三二 これについては、拙稿「少式氏と朝鮮通交―十五世紀前半の動向を中心に―」(『日本歴史』八七四、二〇二二年)で論じた。
- 三三 伊藤幸司は応永三二年の洪川氏没落以降の同氏の通交は博多商人による偽使であるとし(前掲注四、伊藤論文)、荒木和憲もこの説に同意している(前掲注六、荒木著書)。しかし本稿では、応永三二年に始まる九州の抗争により幕府は同年、在京していた満頼に筑前に料所を与え、洪川義俊の後方支援に当たらせたとする黒嶋敏の説(黒嶋敏「九州探題考」(同『中世の権力と列島』高志書院、二〇一二年、初出二〇〇七年)を踏まえ、満頼の下で軍需物資が不足したために自身が朝鮮通交したと考えたい。



三四 前掲注三三、黒嶋論文。

三五 前注に同じ。

三六 史料には「九州都元帥源公」とあるが、元九州探題のことであろう。(申叔舟、田中健夫訳注『海東諸国紀 朝鮮人の見た中世の日本と琉球』岩波書店、一九九一年、一三一頁。)

三七 両氏について『海東諸国紀』には、尙岐に関する情報として「志佐・佐志・呼子・鴨打・塩津留が尙岐を分治している」とある(前掲注三六参照)。

The trade of Shouni-shi with Korea dynasty  
in the first term of the 15th century  
Viewed from the relationship between Shouni-shi and Sou-shi

ITO Akiko

**Abstract**

The Muromachi Era in the first term of the 15th century, Japan traded with Korea dynasty. Shouni-shi, the lord of Chikuzen and Sou-shi, the lord of Tsushima Island also traded with Korea dynasty. How was the relationship between Shouni-shi, Sou-shi and Korea dynasty? This is important issue in medieval Muromachi Era.

The trade of Shouni-shi with Korea dynasty succeeded through the help of Sou-shi in 1402.

In the year 1402~1414, Shouni-shi asked Korea dynasty for munition by trade. Sou-shi helped that trade. In this term, Korea dynasty noted the relationship between Shouni-shi and Sou-shi, and Shouni-shi was upper position beside Sou-shi in Japan.

In the year 1423~1430, the trade of Shouni-shi with Korea dynasty was smooth regardless of the battle with the Muromachi shogunate. Because Sou-shi the partner of Shouni-shi succeeded in making good relationship of trade with Korea dynasty. And powerful position in Tsushima Island traded with Korea dynasty together with Shouni-shi. Shouni-shi noted the power of Sou-shi for trade with Korea dynasty, Shouni-shi and Sou-shi traded with that country together again.

Key words : the foreign trade, Korea dynasty, Shouni-shi, Sou-shi, Muromachi shogunate